

[成果情報名]促成栽培ナスのミナミキイロアザミウマに対する効果的な薬剤防除体系

[要約]促成栽培ナスにおいて、ミナミキイロアザミウマの発生のピークである9月下旬から10月上旬に、効果の高い薬剤を重点散布することで栽培期間を通じて低密度に管理でき、被害果を抑制できる。

[キーワード]促成栽培ナス、ミナミキイロアザミウマ、発消長、化学農薬散布時期

[担当] 病虫研究室

[代表連絡先] 電話 086-955-0543

[研究所名] 岡山県農林水産総合センター農業研究所

[分類] 研究成果情報

-----  
[背景・ねらい]

岡山県の促成栽培ナス産地では近年、ミナミキイロアザミウマの被害が拡大しており、薬剤感受性の低下が懸念されている。そこで、現地における発生生態と防除対策技術を明らかにし、効果的な薬剤防除体系を確立する。

[成果の内容・特徴]

1. ミナミキイロアザミウマ現地個体群は薬剤感受性が低下しているものの、比較的効果の高い薬剤は、アフーム乳剤とプレオフロアブルである（データ省略）。
2. 岡山県の現地促成栽培ナスにおけるミナミキイロアザミウマの発生のピークは、定植後の9月下旬から10月上旬と栽培終期の6月であり、発生量の異なる圃場の比較から、10月の発生のピークの抑制が重要である（図1）。
3. ミナミキイロアザミウマ多発生圃場において、9月下旬から10月上旬にアフーム乳剤とプレオフロアブルを重点散布する薬剤防除体系に改善すると、改善前に比べて10月頃の発生ピークが抑制され、栽培期間を通じてミナミキイロアザミウマの発生量が減少し（図2）、被害果割合が低下し、被害程度も軽くなる（図3）。

[成果の活用面・留意点]

1. ナス全体に薬剤が付着するように丁寧に散布する。
2. 本防除体系においても12月までの防除圧が低いと、その後の防除効果が劣ることがある。
3. 同じ薬剤を連続使用するとミナミキイロアザミウマの薬剤感受性の低下が懸念され、効果が低下するため、連用は避け、物理的、生物的防除法との併用が望ましい。

[具体的データ]

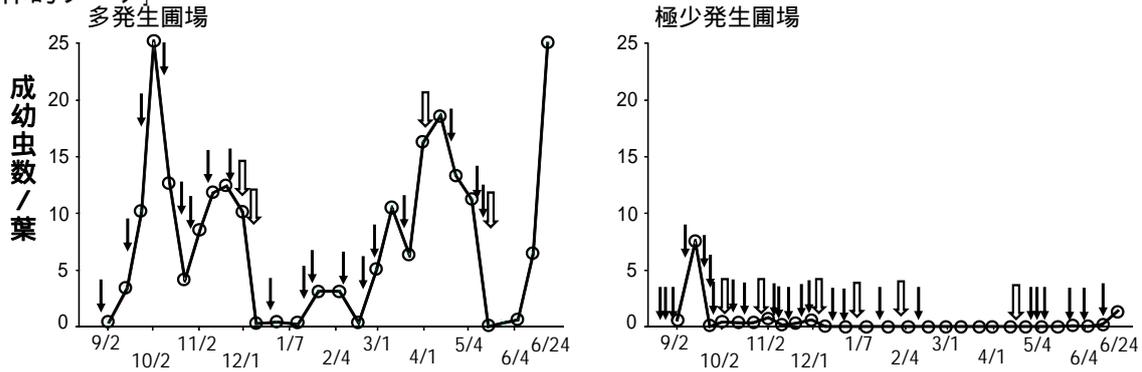


図1 ナスの葉に生息するアザミウマ類成幼虫の発生活消長(2009年)

- 注1) 試験場所: 岡山県農家A圃場(多発生圃場)及びB圃場(極少発生)、品種:「千両」(台木:「台太郎」)、A圃場は防虫ネットの展張なし、B圃場は(6mm×6mm)の防虫ネットを展張。
- 注2) 試験区: 連棟(8.6m×97m)×3(2502.6㎡)、調査は3連棟の中の1棟で行った。
- 注3) 調査ハウスの指定株20株について、完全展開葉上位5葉に生息するアザミウマ類個体数を見取り調査した。
- 注4) 薬剤散布: 農家慣行。白矢印はアフーム又はプレオの散布時期、黒矢印はその他のミナミキイロアザミウマ適用薬剤の散布時期を示す。

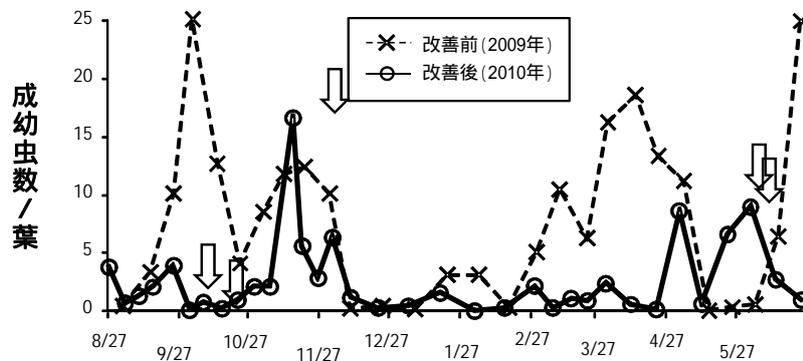


図2 9月下旬から10月上旬の重点防除による改善前後のアザミウマ類発生活消長の比較

- 注1) 試験場所: 岡山県農家A圃場(多発生圃場)品種:「千両」(台木:「台太郎」)、防虫ネットの展張なし。
- 注2) 試験区: 連棟(8.6m×97m)×3(2502.6㎡)、調査は3連棟の中の1棟で行った。
- 注3) 調査ハウスの指定株20株について、完全展開葉上位5葉に生息するアザミウマ類個体数を見取り調査した。
- 注4) 薬剤散布: 改善前(2009年); 農家慣行。改善後(2010年); 9月30日にアフーム乳剤、10月9日にプレオフロアブルを指定散布。その他の薬剤散布については、現地慣行に従った。矢印は改善後(2010年)において、アフーム又はプレオを散布した時期を示す。

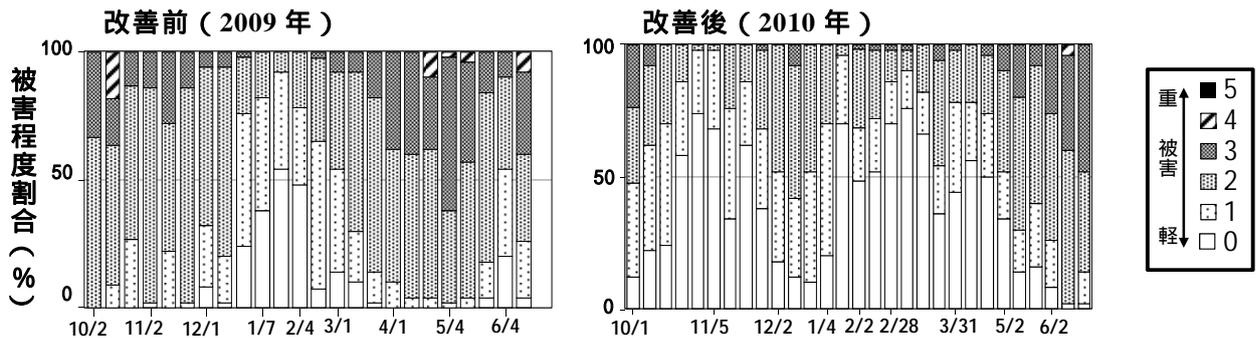


図3 9月下旬から10月上旬の重点防除による被害程度割合の改善

- 注) 被害程度(0:被害なし、1:へたのみ少し食害、2:へたの20%以上が食害痕に覆われる、3:果実表面の5%未満が食害痕に覆われる、4:果実表面の5%以上10%未満が食害痕に覆われる、5:果実表面の10%以上が食害痕に覆われる)

(西 優輔)

[その他]

研究課題名: 促成栽培ナスにおける難防除病害虫の減農薬防除体系の確立

予算区分: 交付金(病害虫防除農薬環境リスク低減技術確立)

研究期間: 2010~2012年度

研究担当者: 西 優輔